



今回ご紹介するのは、清楚な魅力のソリハシセイタカシギ。英名「アボセット」が愛称の本種は、香川県へは初めての渡来です。発見された三橋未来さんのコメントをいただきました。また、あわせて本会事務局が、「珍鳥情報」と「マナー」について述べたいと思います。

### ソリハシセイタカシギ *Recurvirostra avosetta*

北海道から石垣島まで、日本各地に旅鳥または冬鳥として記録がある。河口部や干潟、内陸湿地に渡来する(※1)が、単独のことが多いようである。

四国では徳島県吉野川河口に渡来している(注)。ただ主な文献には四国における記録については言及されていない(※1、その他)。よって香川県では、当然2004年3月21日に大野原町花稲海岸へ渡来した1羽(以下「04個体」)が初記録と思われる。

性別の識別点は虹彩の色で、雄は赤褐色、雌は茶褐色とされている(※2、3など)。

また齢の識別点としては、「幼鳥や若鳥は、成鳥における頭部等の黒色部が褐色味を帯びる」、「初列風切内弁の白斑の入り方が成鳥と第1回冬羽では異なる」(※2)、「幼鳥の足は褐色味を帯びる」(※4)などが指摘されている。

04個体は、虹彩色の確認までに至っておらず、性は不明である。齢については、まず時期からして幼鳥ではありえない。一方初列風切の先端等、他の黒色部に比してやや淡色に見られる部分がかったことから、第1回冬羽の可能性があると考える。ただし筆者は遠距離で観察したことから、詳細な色の差や初列風切の模様まで確認できていない。よって齢の確定は、より近距離での観察結果や鮮明な写真を待ちたい。

(注)筆者(岩田)は観察しておらず、年月日の記録を残し損ねている。インターネット上も年月日の掲載は無いようである。詳細をご存知の方がおられたら、ご教示いただきたい。

※1 「日本鳥類目録第6版」、日本鳥学会、2000

※2 「Guide to the Identification & Ageing of Holarctic Waders」Prater, Marchant & Vuorineen, 1997

※3 「日本の野鳥590」、真木&大西、2000

※4 「日本の野鳥」叶内拓哉、1998

### ソリハシセイタカシギとの出会い

三橋 未来

ここ最近日曜日は試験ばかりで、全然鳥を見ることができず、アカツクシガモさえ見ていなかったのので、今日朝から出かけました。

10時半ごろ豊浜の一宮神社のほうから海岸沿いに見ていくと、いきなりソリハシセイタカシギを見つけました。まわりに誰もいなくてじっくりと見ることができました。そのうち野鳥の会の真鍋さんがやってきて、さっき連絡が入ったところとのことでした。地元のバードウォッチャーの方が朝みつけたそうで、この方もデジスコを持ってやってきました。

20分ぐらい見たところで三豊干拓のほうに飛んでしまったので、アカツクシガモを探しに行き、これもしっかりと見ることができました。

12時ごろに姫浜に帰ってみると人と車がいっぱいソリハシセイタカシギが沖に浮かんでいました。人のせいかわろち着かない様子でした。11月以来の鳥見で大物が二つも見れて、ラッキーな一日でした。(写真も三橋さん)



野鳥を脅かす大きな原因は様々です。時には、私たちの日常的な行動が、大きな影響を与えることもあります。ソリハシセイタカシギの観察中にあったある出来事を中心に、「珍鳥情報」と「マナー」について、述べさせていただきます。

皆さんには、この件を通して、なぜ本会が「マナー」「保護」とうるさく言うのか理解していただければ幸いです。

### 珍鳥情報は「両刃の剣」

珍しい野鳥を見つけた時、その情報を流すかどうかは、非常に難しい問題です。皆で喜びを共有したいものの、大勢が集まれば野鳥や地元への影響は大きくなります。

特に最近、残念ながら自分の「もっとよく見たい（大きく撮影したい）」という欲望を優先する人が見受けられます。自分勝手な行動を続ければ、言うまでも無く野鳥は逃げ、地元の人に嫌われるだけです。ある有名観察地では、野鳥愛好者が多く集まることを嫌い、地元の人が野鳥を追い払うということすらあったと聞いています。

まず覚えておいていただきたいのが、**情報を知らせるかどうかは発見者の自由だ**という原則です。情報交換が日常的になると、つい「義理人情」を優先しがちです。しかし「知らせる義務」はありません。**まず野鳥・地元**に迷惑が及ぶ影響を考え、**問題が起きそうなら情報を伏せる。それこそ現代の野鳥観察（撮影）愛好者の「義務」ではないでしょうか。**

(注) こうした理由から、本会では積極的に珍鳥情報を流すことは避けています。例えば「香川の野鳥FILE」は、発見直後には掲載せず、また問題が起きそうな場合は、野鳥がいなくなるまで掲載を見合わせています。

その結果、スタッフだけが知り、会員の方は知らないという不平等が起こります。しかし本会スタッフも、常に状況を慎重に判断するよう心がけています。また行った場合は、以後の保護活動に役立つため、きちんと記録をとって会誌等に公開しています。これを「自分勝手」と感じられかもしれませんが、情報を扱う難しさをご理解いただければ幸いです。

なお本会としては、「リアルタイムの情報はいりません。」と願っています。後日記録を報告していただければ、スタッフが行く（確認する）必要はないと考えています。

### 筆者が「行こう」と判断した理由

ソリハシセイタカシギは、文字どおり「稀に見る」珍鳥です。長期滞在すれば、それだけ多くの人が集まるだろうと、容易に想像できます。

ただ今回の渡来地は有名な観察地で、しかもシギ・チドリシーズンです。だから情報を伏せる意味があまり有りません。(必ず誰かが見つけます)。その点、発見された三橋さんや地元の野鳥観察者の方が情報を流したことに、問題はないと思われれます。今回の場合、何かトラブルが起これば、それは情報をもらって駆けつけた人間の責任でしょう。

さて、渡来を知らされたとき、筆者は次のように考え、「行こう」と判断しました。

- ・シギ・チドリ類は旅鳥だから、長期間滞在することは少ない。ただその分休息・採餌が重要だ。ただ現地の地形からすれば、通常の観察(撮影)なら、影響は少ないだろう。
- ・すでに多くの人が行っている。自分が行くことで、さらに影響がでるかもしれない。(結局「行きたい」という気持ちに勝てず、ゆっくり移動して人が減ることを期待しました。ただ、入れ替わりながらずっと人がいることが問題でもありますので、これは自己満足です。)
- ・地元への影響だが、自分は現地を何度も行ったことがあるので、邪魔にならずに駐車できる場所や交通状況もわかっている。ただ小さな子がいるので、騒いだり、交通の邪魔にならないよう配慮が必要だ。

なお今回、本会スタッフの城戸氏は「行かない」という選択をされました。その自制心から敬意を表すしだいで。

## 現場で起こった問題

さて現場では、まだ多くの方がソリハシセイタカシギとの出会いを楽しんでいました。やや賑やかでしたが、幸い干潮となりつつあり、波打ち際のソリハシセイタカシギは徐々に遠ざかっていましたので、大きな影響はなかったと思います。

しかし観察者が少なくなった時、なんとソリハシセイタカシギに近づくため、複数の野鳥撮影者が干潟へ降りて行ったのです。

干潟じたいは立入禁止ではなく、地元の方が採貝などのために入ります。野鳥がいても構わず降りますが、しかしそれは、まさに地元の方だから許される行為です(野鳥に関心の無い地元の方には、不思議と野鳥も警戒しません)。

しかし野鳥観察(撮影)を「趣味」とする人間が、長旅で疲れているだろう野鳥を撮影するため、その生活圏に入ってまで追いかける必要は全くありません。

干潟に降りた人たちは、私より早くから現場にいました。ですからもっと近くにいる時に撮影できているはずです。おそらく彼らは、「もう十分撮影しているから飛び去っても構わない。どうせ明日もいる保証はない。」と考えて、干潟へ降りたのではないかと思います。

しかし、これほど自己中心的な行為はありません。ソリハシセイタカシギだけでなく、干潟にいる他のカモメ類たちへの影響。地元の方に「干潟を歩き回って荒らしている」と感じさせかねない行為。また、今まさに駆けつけていたり、「今日は無理だが明日なら行ける」と楽しみにしている、同じ趣味を持つ野鳥観察(撮影)愛好者への裏切り。自分たち以外の野鳥・人への配慮は全くありません。

彼らが挟むように近づけば、ソリハシセイタカシギも徐々に移動。それでも近づけば、飛び立ってしばらく旋回し、遠くへ着地します。嫌がっているのは誰の目にも明らかでした。

彼らはそれでも近づきます。この状況に耐えられず、筆者はその場を去りました。

(注)私はその場で注意すべきでした。特に保護団体として活動している立場からすれば、人一倍そうすべきであり、「言動一致ではない」と責められても仕方はありません。

ただ、私より何歳も年上で、私より長く野鳥観察(撮影)をしている人に注意する、という空しい行動は、どうしてもできませんでした。こうして会誌に掲載し、より多くの方に訴えることで罪滅ぼしをしています。ただ今度同じような状況に出会えば、果たして注意できるか。正直、まだ「できる」と言い切れないことに、自分の限界を感じています。

夕刻近くに現場に到着した曾根氏によれば、すでに彼らはおらず(撮影には暗くなり過ぎたのでしょう)、幸いソリハシセイタカシギは落ち着いている様子だったとのこと。

ただ結果から言えば、ソリハシセイタカシギは翌日早朝には旅立ったようです。

彼らの行為が直接影響を与えたとは言いません。旅鳥である以上、1日で通過することはよくあります。しかしだからこそ、ゆっくり休ませてあげたかったと思われてなりません。

情報を流す側、また情報を受け取った側。皆が配慮していても、こうした行為が発生するのが、現在の野鳥観察(撮影)趣味の現実です。こうした事件が続けば、全ての野鳥観察(撮影)愛好者が批難されます。まず本会の会員から、周りに誰も居なくても、節度ある行動をお願いします。



▲ →の辺りにソリハシセイタカシギがいる。それを取り囲む撮影者5人。  
手前の堤防が、通常観察する場所である。